

ラシーヌ悲劇における
「極限状態」を表す文学的表現技巧について
——『アンドロマック』の分析を通じて——

Figures de l'excès chez Racine

—A travers de l'analyse d'*Andromaque*—

佐藤 久美子

ラシーヌの『アンドロマック』(1667年上演)は、彼の数ある美しい悲劇の中でも、初期の傑作としばしば目される。実際、トロイア戦争の後日談であるこの作品は、さまざまな観点から、すでにラシーヌ悲劇の完成の域に達したものであると思われる。なかでもその登場人物たちは、極めて微妙な心理を抱くものであると同時に、それぞれが自らの在り方を「極限」まで、あるいは「極限」を超えてまで貫くものとして描かれており、観客・読者の心を極めて激しく揺さぶるものである。本論では、それぞれ「極限状態」に向かう(あるいは超える)、登場人物のありようとその文学的表現技巧を追うことによって、この秀逸した作品に見出されるラシーヌ悲劇の特徴のひとつを明らかにしようとする。

『アンドロマック』が、古代ギリシャ悲劇や、古代ローマ悲劇、叙事詩等に、その「悲劇の主題」、「舞台となる場所、筋書き、4人の登場人物とその性格」までも負っていることは、ラシーヌ自身が、その第1版(1668年)に付した「妃殿下へ」というアンリエット・ダングルテール妃への書簡体献辞の中で、ウェルギリウスの『アイネーイス』第3書におけるアイネーイスの言葉を引用した上で、認めていることである。しかしながら、彼は、先人たちの残した作品から、精緻なフランス語による5幕韻文悲劇——音楽性豊かな詩句、極めて的確な語、巧みな構成からなる、4人の登場人物たちのいわば4つの「片思い」が至る、簡素だが、繊細、そして緊張感に富む惨劇——を新たに創り出した。トロイア戦争の勝利者であるギリシャ方のオレストは、同じくギリシャ側のスパルタ王、メネラスの娘エ

ルミオーヌを愛し、エルミオーヌの方は、トロイア戦争勝利に貢献した英雄、エピールの王、彼女の婚約者でもあるピリュスを熱愛している。他方、ピリュスは、婚約者があるにもかかわらず、トロイア戦争で無残にも敗れ、夫エクトールを失ったアンドロマックを愛してしまい、囚われの身であるアンドロマックの方は、亡きエクトールに変わらぬ強い愛情を抱き続け、その忘れ形見である幼い息子アスティアナクスを愛しむことだけを生きがいとしている。このように、登場人物それぞれが、それぞれに満たされない思いに身を焦がし、思う相手の言動に一喜一憂し、最終的に誰もが(この悲劇の題名であるアンドロマックを除き)取り返しのつかない状況に至るわけであるが、ラシーヌは、この悲劇的な終末へと向かう登場人物たちの言動を極めて巧妙に描き出している。それでは、このヨーロッパの古典文学作品が、ラシーヌの優れたフランス語の文学的表現技巧によっていかに、再創造されているか見てゆくことにしよう。

Ⅰ. オレスト——過酷な「運命」としての情念

『アンドロマック』の冒頭と終幕に登場するのは、作品の題名が提示するアンドロマックではなく、ギリシャ側の英雄アガメムノンの息子オレストである。すでに触れたように、オレストは、スパルタ王の娘エルミオーヌに燃える恋心を抱いている。第1幕第1場、エルミオーヌがピリュスと結婚するために赴いたエピールを自らも訪れたオレストは、半年前に生き別れた親友ピラードに再会し、次のように、この悲劇の幕を開ける。

そうだ、こんなにも忠実な友に再会できたのだから、
私の運命は、これまでとは違ったものになるだろう。
いや、すでに、運命の怒りも和らいだかのように思われる、
この地で、私たちを再会させてくれたのだから。
誰に想像できただろう、私の恋にはかくも呪わしいこの国、
そこに着くやいなや、ピラードがオレストの目の前に現れるとは？
お前を失ってから半年もたった今、
ピリュスの宮廷で、お前が私のもとに返されようとは？²⁾

この台詞は、親友ピラードとの再会を喜ぶものではあるが、同時にオレ

ストが、すでに過酷な「運命」としての恋に苦しみながら、その「運命」が「これまでとは違った」新たな局面を展開するのではないかという期待を示すものである。実際、この台詞に続く、彼とピラードとのやりとりによって、オレストが、エルミオーヌへの満たされない思いに、遠い過去より悩み、しかしその思いを断ち切ることもできずに絶望し、「常に」死を「求め³⁾」、「海から海へと恋の鎖と苦しみを引きずり⁴⁾」ながら彷徨っていたことが明らかになる。そんな彼が、なぜ恋敵ピリュスの治めるエピール、「私の恋にはかくも呪わしいこの国」に赴くことになったのであろうか。

ああ、私を導く運命など誰にわかる？

恋が、この地に残酷な女を探しに私を赴かせた。

だが、その恋が、私の運命をどのように導くか誰にわかろう？

一体私が求めているものは、生か、あるいは死か？⁵⁾

このようにオレストは叫ぶ。エルミオーヌへの思いをいよいよ断ち切ることを決意したオレストは、冷静な心をもったつもりでギリシャに到着する。しかし、そこで彼は、ピリュスが、アンドロマックへの恋心ゆえに、トロイアの生き残りであるアスティアナクスを殺さず、その母との結婚を望んでいることを知る。つまり、ピリュスとエルミオーヌの婚約は、破棄されるかもしれないのである。オレストの心には、諦めたはずの恋の炎が再燃する。アスティアナクスの引き渡しを要求するギリシャ側の使者の役を任せられ、しかし実はエルミオーヌを奪いに、オレストはエピールにやってきたのだった：

前にもまして激しく燃え上がる恋の焰だ、

どんな危険にもしり込みするものではないと思ってくれ。

あれほど努力して抵抗しても無駄であったのだ、だから

私を引きずり回す運命に、盲目的に身を委ねるのだ。⁶⁾

「前にもまして」オレストの恋心が激しいものになっていることは、「どんな危険にも」に冠された形容詞の最上級によって強調されている。そして、以降、オレストは、恋心が抱かせる期待と、それがことごとく幻想であることが明らかになることによる失望や怒りとの激しい感情の振幅を

「盲目的に」行き来する。ピリュスは、エルミオーヌとの婚約を退けるかに見えたと、思い返し彼女との結婚を決意し、オレスト自身にその仲介役を頼みさえし、そしてまた再びその決意を翻す。自分がオレストに愛されていることをよく知っているしたたかなエルミオーヌは、言葉巧みに、ほかない希望を抱かせては、その信じやすい恋人を自らの恋の成就のために「引きずり回す」。そのたびに激しく動揺するオレストの心。が、最後には、彼が望んでいた死よりもおぞましい「運命」が、オレストを待ち構えていたのであった。

ピリュスとアンドロマックの結婚がついに決定すると、寡黙となったエルミオーヌはオレストを呼びつける。いまだに恋の幻想から覚めないオレストは彼女のもとに駆けつける：

オレスト

ああ、姫君！ 本当なのですか？ 今度ばかりはオレストのあなたに会いたい気持ちがお心に沿うものだというのは？
(……)

エルミオーヌ

私は知りたい、殿下、あなたが私を愛しているのか。

オレスト

あなたを愛しているかですって？ 何ということをも！ 私は誓い、それを裏切り、

逃げ、戻り、敬い、罵りました。

私の絶望、絶えず涙にぬれている私の瞳、

そういった証拠をお信じにならないなら、どんな証拠をお信じ下さるのか？

エルミオーヌ

復讐しておくれ、そうしたらすべてを信じよう。

(……)

急いで神殿へ。殺すのです。

オレスト

誰を？

エルミオーヌ

ピリュスを。⁷⁾

二人の短い台詞のやり取りは、彼らの切迫した心情を効果的に表現する。婚姻の儀が今や交わされようというその時、エルミオーヌはオレストにピリュス殺害を命ずるのである。さすがにためらうオレストをエルミオーヌは急きたて、ついには説得する。そして、ピリュスは祭壇の上で殺戮されることになる。ところが、その知らせを急いで伝えに戻ったオレストに、エルミオーヌは罵声を浴びせ、自らが命じたという事実を否認する。それだけではない。茫然自失したオレストのもとに、エルミオーヌがピリュスの屍の上で自害したとの知らせが入る。とうとう、オレストは、その理性を失ってしまう。狂気が、オレストに準備されていた過酷な「運命」の終末であったのだ。

オレスト

彼女が死んだ？ 神々よ、なんということだ！

ピラード

では、ご存じなかったのか？

(……)

(彼女は)手に短剣を持ち、ピリュスの上にかがみ、
まなざしを天に向け、自らを貫くと倒れられました。

オレスト

神々に感謝するぞ。私の不幸は、私の期待をはるかに超えてしまった。
そうだと、天よ、私はお前に賛辞を送る、お前のその執拗さをだ。
飽くことなく私を罰し、
お前は、私を苦悩の極みにまで至らしめた。
お前の憎悪は、私の不幸を作り上げることに喜びを見出したのだ。
私はお前の怒りの見せしめとなるため、
不幸な運命の完璧な姿となるために、生まれてきたのだ。

(……)

だが何が見える？ 私の目の前でエルミオーヌが彼(=ピリュス)を抱擁する？
奴を襲う一撃から護るつもりだな？

神々よ！ なんと恐ろしい目つきで彼女は私を睨めつけていることか？
何という悪霊、何いう毒蛇の群れを後に引き連れていることか？⁸⁾

冒頭で、自らの「運命」の「これまでとは違った」展開を期待していた

オレストは、こうして彼の「期待をはるかに超えた」、「極限」を超えた「運命」、狂気に至る。「だが、何が見える？ 私の目の前でエルミオーヌがピリュスを抱擁する？」そして彼の目に映るのは、「悪霊」、「毒蛇の群れ」……『アンドロマック』という作品を締めくくるのは、彼のこの「不幸な運命の完璧な姿」なのである。

II. ピリュス——不実な婚約者、不実な王の恋

狂気に至るまでエルミオーヌへの思いに「忠実」であったオレストと対照をなすのが、不実で移り気な婚約者ピリュスである。すでに触れたように、彼はエルミオーヌと婚約を交わしており、それは、エルミオーヌの父、スパルタ王メネラスによって取りはかられたものではあるが、神々の前で誓われた「聖なる⁹⁾」ものでもあった。さらに、スパルタは、トロイア戦争時の同盟国である。二人の婚約は、当事者同士のみならず、政治的な関係にも関わるわけである。そんな婚約をピリュスは解消しようかに見える。アンドロマックへの恋心ゆえに、彼は、その息子アスティアナクスをかくまい、オレストが伝えるギリシャ側からの引き渡しの要求を激しくしりぞける。作品冒頭近く、第1幕第2場、オレストに対して、ピリュスは、エルミオーヌへの思いを次のように語る：

エルミオーヌは、殿下、相変わらず私にとっていとしい女であり得るし、彼女の父親の言いなりにならずとも、彼女を愛することもあり得よう。さらに、恐らく今日のうちにも、私の地位への心遣いと、私の愛へのそれを折り合わせられるであろうか
と
思っている。¹⁰⁾

「あり得る」、「恐らく」、「あろうかと思っている」など、ピリュスの言葉は不確実性に特徴づけられている。ピリュスはまだ躊躇している。だか、その本心は、自らにはすでに明らかである。第1幕第3場、オレストが去り、ピリュスの後見人フェニックスが、エルミオーヌとオレストが愛し合うことになるのではないかという心配を口にすると、彼は思わず次のように叫ぶ：

ああ！ フェニックス、彼らが愛し合うだと！ 同意しよう！ 彼女は
発てばよいのだ。

互いに夢中になって、二人はスパルタへと帰ればよいのだ。
彼女に対しても彼に対しても、わが国の港はすべて開かれている。
彼女が私を束縛とうんざりした気持ちから解放してくれたなら！¹¹⁾

ピリュスのこの「束縛」に対する嫌悪、エルミオーヌに対しての「うんざりとした気持ち」は、結局彼の行動を決定するものになる。一度は、アンドロマックの頑固なつれなさや彼女の亡き夫へ変わらぬ思いに腹を立て、彼は、「ギリシャに、父（アシル＝アキレウス）に、そして自分自身に対して裏切りものになろうとしていた¹²⁾」自分を悔い、ギリシャの怒りをもっともだと考え、アスティアナクスの引き渡しとエルミオーヌとの結婚を決意する。このピリュスの決心が引き起こす、オレストの絶望。そしてエルミオーヌの歓喜。しかしアンドロマックの涙と懇願に、彼の心は簡単に再び翻り、エルミオーヌとの結婚のために準備されていた神殿へとアンドロマックを引きずるように導くことになるのである。

このピリュスの婚約は、政治的な同盟関係と重なり合っていることは先に触れた。エルミオーヌとの、そしてその父スパルタ王メネラスとの誓約を破ることによって、彼はトロイア戦争の同盟国を敵に回すことになるわけである。すでに、アスティアナクスという、ギリシャ勢にとっては不倶戴天の敵、亡きエクトールの息子をかくまっていることで、彼がギリシャ勢の反感を買い、引き渡しを迫られていることも、すでに述べたとおりである。ピリュス自身もちろんその自らの政治的立場の危機については十分承知している。しかし、ギリシャ側の使者オレストに対して、ピリュスは次のように言う：

オレスト

(……)

そして彼（＝エクトールの息子）のために、彼ら（ギリシャ勢）がエピールまで攻めてこないとも限りません。

ご用心を。

ピリュス

いやいや、私は喜んで同意しよう！

ギリシャ人たちがエピールに第2のトロイアを求めて攻めてくることに。

彼らが、憎悪を混同し、勝利を取めさせてくれた者たちの血と打ち負かされた者たちの血を見分けられなくなればよいのだ。¹³⁾

ピリュスはギリシャ側に敵対することに満足せず、かつての敵国、自らが父と共に英雄として壊滅させたトロイアに、自国エピールをなぞらえる。アンドロマックへの恋に盲目的になっている彼にとって、トロイアはもはや敵ではなく、自国エピールが「第2のトロイア」となることを引き受けようとするわけである。

このピリュスの政治的な裏切りは、アンドロマックへの感情が高まるにつれ、またギリシャ勢からの要求に追い詰められてゆくにつれ、より極端な方向へと推し進められる。彼は、アステシアナクスを救うのみならず、自らそのエクトールの息子の「父」となり、「トロイア人たちの恨みを晴らす」ために自ら「教育」と宣言する：

あなた(=アンドロマック)にご子息を返し、私が彼の父となりましょう。
私自身が、トロイア人たちの恨みを晴らすよう教育しましょう。
ギリシャと戦い、あなたの恨みと私の恨みを果たしましょう。
(あなたの)まなざし一つで、私はどんなことでもやってみせる。
あなたのトロイアは今再び廃墟の底から姿を現す。
ギリシャ人たちが攻め落とすのにかけた時間ほどかからずに
再び聳え立つ城壁のなかで、私にはご子息を王位につかせることができ
ましょう。¹⁴⁾

トロイアの復興を図るピリュスは、もはやギリシャ勢にとっても、エクトールを殺害した父アシルにとっても、反逆児そのものである。すでに述べたように、ピリュスがひとたびその心を翻しはする。しかし、最終的には彼は自らのアンドロマックへの自らの思いを選ぶ。彼女との結婚の儀が交わされる神殿では、彼は「喜びに酔いしれ¹⁵⁾」、自らに迫る危険は顧みることない。彼が、厚い警護を命じるのは、「エクトールの息子にのみ¹⁶⁾」である。かくして、オレストが導くギリシャ勢は、苦もなく、ピリュス殺害に成功するのであった。

不実な婚約者であり、不実な王であるピリュスは、こうしてその制裁を受ける。しかしこの不実を「極限」まで推し進めた彼も、アンドロマックへの愛情——一方的で自分勝手なものではあるが——という観点から見れば、その真摯さがうかがえる。そんなピリュスをアンドロマックはよく見抜いていた。「私（＝アンドロマック）は、ピリュスがどんな男か知っている。気性は激しいが誠実な人だよ。¹⁷⁾」そればかりか、エルミオーヌに対しても、ピリュスは、できるだけ誠実であろうとし、アンドロマックとの結婚前に、彼女のもとに婚約破棄の赦しを求めに自ら赴いている。エルミオーヌは、その「率直な告白¹⁸⁾」を評価すると応じる。しかしながら、彼女は、すでにピリュス殺害をオレストに命じていた。したたかなエルミオーヌの言葉は、文字通りに受け取られるべきものではないのである。

Ⅲ. エルミオーヌ——したたかな女の激情

ピリュスとエルミオーヌとの婚約が、彼ら二人の心によるものではなく、彼女の父親によって決められたものであり、同時に政治的な同盟に関わるものであることは先に触れた。しかし、エルミオーヌにとっては、その婚約が持つ拘束力や政治的側面はほとんど重要ではない。彼女は、自らが心から愛する人ピリュスの裏切りに怒り、苦しみ、策略を練るのであった。

第2幕冒頭、ピリュスの不実に苦しむエルミオーヌのもと、オレストが到着する。変わらぬ不幸な恋心を訴えるオレストに対して、エルミオーヌは、次のような巧みな言葉で彼の恋心を惑わせる：

エルミオーヌ

まあ、何でしょう！（……）

いつも決まって引きあいに出されるそのつれなさとは何ですか？

エピールには参りましたが、ここでは流刑の身同然。

父に命じられたのですもの。でも誰にわかるでしょう、それ以来苦しいお気持ちを、私もひそかに味わっていません（……）

そもそも、誰が言いました、私の義務にもかかわらず、あなたにお目にかかりたいと願うことがかつてなかったと？

オレスト

私に会いたいですって！ ああ、素晴らしい姫よ……¹⁹⁾

エルミオーヌの台詞は、両義性に満ちている。彼女がエピールにやって来たのは、果たして、「父に命じられた」ためか？ 彼女「も」苦しんでいるのは、オレストのためか？ そして、「誰が」実際に「言った」のか。(エルミオーヌが)「あなたにお目にかかりたいと願うことがかつてなかったと？」一瞬歓喜するオレスト自身も、すぐに懐疑的になる。「でも、お願いです。そのお言葉は、私に対するものですか？²⁰⁾」しかしながら、彼は、彼女のしたたかさに打ち勝てない。二人の会話は、エルミオーヌがオレストに、アスティアナクスの引き渡しの要求のために(すなわちアンドロマックとピリュスとの結婚を妨げるために)行動することを促す次のような台詞で終わる：

はっきり申し上げますわ。その上でご行動ください。

ご承知のとおり、この国に来たのは、義務に従ってのこと。

私を引き止めているのもその義務ゆえのこと、父かピリュスカが発てと言わない限り、立ち去るわけにはいきません。

メネラスの名において彼(=ピリュス)に知らせてほしい。

ギリシャ人たちの敵は、婿にするわけにはいかないと。

トロイアの子か、私か選ばせるのです。

(……)

ではまた。ピリュスが同意すれば、あなたと共に発ちましょう。²¹⁾

エルミオーヌは、自らの個人的な感情の運命を、ギリシャとトロイアとの間の政治的なそれに巧みにすり替えるわけである。「ギリシャ人たちの敵」とは結婚できない。「トロイアの子か、私か」？ 恋するオレストは、エルミオーヌの本心に気づきながらも、彼女の命を全うすべくその場を去る。ピリュスの本心をも知っている彼もまた、内なる思いを抱いている。アンドロマックを愛しているピリュスは、「トロイアの子」を選ぶであろう。エルミオーヌは、オレストと共に、エピールを「発」つことになるだろう。

ところが、ピリュスは予期せぬ決断をする。エルミオーヌとの結婚。それも、オレストの介添えによって。²²⁾オレストは激昂し、エルミオーヌの誘拐を密かに企てる。激情を押し殺して彼女に再会した彼に、エルミオー

ヌもまたその喜びを覆い隠して次のように言う：

オレスト

あなたのお心は、彼（＝ピリュス）の願いに背くことはありますまい？

エルミオーヌ

(……)

でも、殿下、私に何ができましょう？ 私の誓いはひとが与えたもの。

私から受けたものでもないものを彼から奪うことなどできますか？

一国の王女の運命を決めるものは、愛情などではありません。

服従の名誉だけが、私たちに許されていること。

それなのに私は発とうとしていた、だからおわかりでしょう、

あなたのために私がどれほど義務をないがしろにしようとしていたか。²³⁾

動詞の半過去が仄めかすエルミオーヌの欺瞞。「私は発とうとしていた」。「義務をないがしろにしようとしていた。」過去には可能だった。でも、今はもうできない。ピリュスと結ばれる歓喜を心に秘めながらも、エルミオーヌは、そのしたたかきでオレストを苦しめる。そして、彼女の言動のこの巧みさは、彼女の運命が暗転するとき、このうえなく巧妙な残酷性を帯びたものとなる。

ピリュスが再び心を変え、アンドロマックとの結婚を決意すると、エルミオーヌがオレストに復讐のため、ピリュス殺害を命ずることはすでに述べた。ためらうオレストをエルミオーヌは激しく攻め立てる。「ああ、もうたくさん、殿下！ そんな理屈ばかりでは、私のこの怒りを掻き立てるばかり。私は、あなたを私の心に沿うものにしてさしあげようとした、オレスト様が満足するようにと。でもあなたはいつも不平ばかり並べ、何一つおできにならない。²⁴⁾」そして、いまだ恋心の幻想から醒めやらぬオレストは、ついに決心し、神殿へと向かう。が、エルミオーヌの怒りは、それでも満足しない。彼女は、自分自身がピリュスを殺す「快楽」次のように述べる：

何という快楽だろう！ この手で私が受けた辱めを晴らすことができたなら、

この腕を、裏切り者の血で染めることができたなら。
そして、彼の苦痛と私の楽しみをより大きなものにするために、
死んでゆく彼のまなざしには、恋敵の姿は決して見せはしない。²⁵⁾

こうして、エルミオーヌの復讐心は、倒錯性を帯びてくる。そして、その復讐の「楽しみ」は、「より大きなもの」であるべきである。さらに、彼女の憎しみは、研ぎ澄まされてゆく。それまでは、自らのピリュスへの執着に関して政治的側面を強調してきたのに反して、彼女は、死んでゆくピリュスが、「国家のためではな」く、彼女自身の「憎悪」によって殺されるのだということを「はっきりとわか」ることを要求する：

ああ！ オレストが、彼（＝ピリュス）の罪を罰するとき、
私の生贄として死ぬのだという後悔をさせてやらなければ！
オレストのところに行って。彼が、恩知らずにはっきりとわからせるよ
うに、
殺されるのは、私の憎悪のため、国家のためではないと。
クレオーヌ、急いで。私の復讐が無駄になってしまう、
もし彼が死に際して、殺すのは私だということを知らなければ。²⁶⁾

そして、復讐を託したオレストが、ピリュスとアンドロマックの婚姻の儀が取り交わされる神殿で再び躊躇していることを知らされると、エルミオーヌの激情は、頂点に達してしまう：

ならばもうよい。復讐できるのは私だけだ。
苦しみの叫び声が神殿に響き渡るがよい。
(……)
この混乱の極みでは、誰彼と構わない、
誰も彼もが私にとってはピリュスなのだ、オレストさえも。²⁷⁾

エルミオーヌの復讐心の「混乱の極み」においては、復讐の相手さえもう定かではない。「誰も彼も」がピリュスであり、「誰も彼も」の死、「オレスト」のそれさえも、彼女の恨みを晴らすものとなるのである。

果たして、彼女の望みは遂げられる。オレストが、ギリシャ勢とともに

ピリュス殺害に至ることはすでに触れたとおりである。また、その手柄を急いでエルミオーヌに伝えに来たオレストに、彼女は自分がその殺害を命じたことを否認し、ついにはピリュスの亡骸の上で自害することもすでに述べた。したたかで、残虐、錯乱に至るまでの復讐心に燃えた彼女は、最後には、愛する男と死によって結ばれることを望んだわけである。実際、それほどまでにピリュスに対して激しい憎悪の念を抱いたエルミオーヌは、その激情のなかでさえ、彼への思いに悩み苦しんでいた。婚約解消の赦しを乞いに来たピリュスとの唯一で最後の対面のあと、復讐心を新たにする彼女だが、その独白は次のようなものである：

私はどこにいるの？ 何をしたの？ さらに何をすべきなの？
何という激情が私をとらえるの？ 何という苦しみが私を苛むの？
ふらふらと、目的もなく、私はこの宮殿の中を走りさまよう。
ああ！ 愛しているのか憎んでいるのか、それさえわからないのか？
残酷な男！ 私のもとを去る時のあの目つきはどうだろう、
せめて上辺だけの憐れみも、苦しみも見せないあの目つきは？
(……)

それなのに、まだ私は彼を憐れんでいる？ その上苦しいのは、
私の心、私の意気地のない心は、彼のためを思っている？
彼に脅かす一撃を思うだけで、私は震えている？
復讐するつもりで、もう彼を赦している？
(……)

いやいや、もう一息、オレストがなすがままにしよう。
死ぬがよい、所詮そうなることはわかっていたはず、
所詮彼が私にそれを望ませたのではないか……
それを望む？ 何ということ？ それを命じるのは私なのか？
彼の死は、エルミオーヌの愛の結果なのか？
あの王、かつて私の心が、
その数々の軍功を、あれほどまでの喜びをもって繰り返し語った、
あの不吉な縁組が決められる以前に、
私自身が、密かに未来を捧げていたあの王を。
それでは、私は、あれだけの海とあれだけの国を越えて、
彼の死を準備するためだけにあれほど遠くからやって来たのか、

彼を殺す？ 彼を亡きものに？ ああ！ 彼が息を引き取る前に……²⁸⁾

これらの言葉は、したたかさや残虐さを研ぎ澄ましてきたエルミオーヌのものとはほとんど思われぬ。しかし、激しく愛する男に裏切られた耐えがたい悲しさ、裏切られても愛さずにはいられない底知れぬ苦しみにもがく女の姿もまた、他ならぬエルミオーヌのものなのである。そして、ピリュスの死後、彼女はその真の姿を偽りはしない。「恋に狂った女」の姿を隠そうとはしない。ピリュス殺害の知らせを誇らしげに伝えるオレストに対して、彼女は、その罪を命じたことを次のように否認する：

エルミオーヌ

さあ、お答え、誰があの人の運命をお前に委ねた？
なぜ殺した？ 彼が何をした？ 何の権利があつて？
誰がそうしろと言つた？

オレスト

おお、神々よ！ 何ですって？ あなたが、
あなたご自身が、ここで、さっき、彼の死をお命じになつたではないか？

エルミオーヌ

ああ！ 恋に狂った女の言葉など信じるべきだったのか？
私の心の奥底を、お前は読むべきではなかつたか？
お前にはわからなかつたのか、激情のなか、
私の心は、私の言葉といつても裏腹だつたということが？²⁹⁾

エルミオーヌには、もはや生きる意味はない。「ギリシャもスパルタもその帝国も、私の一族全体も³⁰⁾」、もちろん彼女には意味はない。彼女の巧妙さが、彼女の「心」が、「言葉といつても裏腹だつたこと」が「わからなかつた」オレストを惑わす必要ももはやない。そして、残虐な彼女は、自らも非業な最期を選ぶのであつた。

IV. アンドロマック

その名をこの悲劇の題名とされているアンドロマックの登場場面は極めて少ない。また、この主要登場人物は、他の登場人物たちに比べて、概し

て寡黙でその言葉は簡素である。息子アスティアナクスとともに囚われの身となった彼女は、ただ、変わらぬ思いを抱く夫の死と祖国トロイアの滅亡を嘆き、息子の運命を案じるのであった。

彼女が心情を吐露するのは、腹心セフィーズと年端もゆかない息子に対してのみ。その一例、一日に1回会うことを赦された息子を胸に抱きながら、彼女は次のように亡きエクトールへの思いを語る：

「彼（＝アスティアナクス）を絶えず抱きしめながら、彼女は言っていた。）エクトールだわ。

瞳も、口元も、それにすでにその大胆さも生き写し。

彼（＝エクトール）自身だわ、愛しい夫、私が抱きしめるのはあなただわ。」³¹⁾

そんな彼女にとっては、ピリュスの執拗な求愛は、全く受け入れられるものではない。「身寄りも友もなく、私（＝ピリュス）以外に望みはない」、「異国の女、（……）それも、エピールの国の囚われの身³²⁾」という孤立無援の状態におかれても、彼女はその忠実な態度を変えようとはしない。業を煮やしたピリュスは、彼女の頑固なつれなさの代償として、アスティアナクスの命を脅かす。彼女は、むしろ自分たちふたりの追放を要望する。ますます激昂し、脅迫を新たにすピリュス。アンドロマックの変わらぬ涙ながらの懇願。ついにピリュスは、最後通牒を言い渡す：

申しあげよう、死ぬか、妃となるか、どちらかだ。

一年にもわたるつれなさに絶望して、私の心はもはや不確かな運命に耐えきれない。

あまりにも長い間、畏れ、脅し、嘆いてきた。

あなたを失えば、私は生きては行けない、が、待たされたままでは生きてはけない。³³⁾

それでも、アンドロマックの心は変わらない。しかし、愛する「エクトールが愛の炎の証として残した息子³⁴⁾」の死を彼女は受け入れられるか？「彼（＝アスティアナクス）とともに、一族の血が絶えるのを黙って見ていられるか？³⁵⁾」追い詰められたアンドロマックは、夫の墓に赴き、つい

に腹心のセフィーズに次のような決心を打ち明ける：

が、お前は、もっと私のことを分かっていると思っていたわ。
何ですって！ おまえは思ったの、アンドロマックが心を変えて、
私のなかに今も生きているつもりでいる夫を裏切るとでも？
幾多の死者たちの苦しみをよびさまして、
自分が安泰であれば、彼らの安らぎは掻き乱すとでも？
夫の遺骸にあれほどまでに誓った熱情とはそんなものだったか？
が、息子が死に瀕していた、彼を助けなければならなかった。
ピリュスは、私と結婚することで、味方になると誓っている。
それだけで十分。息子のことは彼に任せよう、
(……)

だから、私は、所詮この身は捨てなければならないのだから、
ピリュスに、私の残りの命を約束しよう。
私は、神殿の上、彼の誓いを受け入れ、
彼を私の息子に永遠の絆で結びつけよう。
が、即座に、私の手、私だけに呪わしいこの手は、
残りの不実な命を絶切ってしまうだろう。
そうすることで、私は徳を守り、義務を果たす、
ピリュスに、息子に、夫に、そして私に対して。³⁶⁾

ついに、アンドロマックは、ピリュスとの求婚を受け入れる。だが、それは、婚姻の儀における一瞬、ピリュスの「誓いを受け」る一瞬のためだけである。その彼の誓いによって、息子は彼の庇護のもとに「永遠」に置かれるだろう。「が、即座に」、彼女は自らの「命を絶」つ。「徳を守り、義務を果たす」ため。それも、彼女が関わるすべての人に対して。「ピリュスに、息子に、夫に、そして私に対して。」例外的に長い彼女のこの台詞における、短い単語の羅列は、「極限状態」に置かれた彼女の穏やかだが固い決意を極めて効果的に表している。エルミオーヌのしたたかさとは全く性質の異なる「私(=アンドロマック)の愛の罪のないはかりごと³⁷⁾」。第4幕1場、悲劇のほぼ中央に配された、彼女のこの決意は感動を呼ばずにはおかないであろう。そして、以降、アンドロマックは舞台から完全に姿を消してしまう。

かくして、『アンドロマック』における4人の主要登場人物たちは、それぞれがそれぞれのかたちで「極限状態」へと向かう。過酷な「運命」にもてあそばれたオレストは狂気に至り、婚姻の誓いや同盟関係の裏切りを極端に推し進めたピリュスは殺害され、したたかだが、激しい復讐心と愛情に引き裂かれたエルミオーヌは自害する。アンドロマックもまた、追い詰められた状況で自殺を企てる。

彼らを「極限状態」へと駆り立てるのは、結局のところ、それぞれが抱く激しい感情である。オレストの「運命」とは、巧妙なエルミオーヌへの自らの執拗な愛情に「盲目的に」引き連れられることであり、ピリュスのさまざまな裏切りや脅迫は、アンドロマックへの一方的な恋心によるものである。エルミオーヌは、自らの激情を極めてうまく統御し、オレストを利用して復讐を果たすが、最終的にその心は偽れない。彼らの思いは、すべて、「愛」Amourという言葉、あるいはその比喩である「火」feuや「炎」flammeと表現されている。しかし、彼らの「火」や「炎」は、本当に「愛」だろうか。激しい恋心ではあるにせよ、激昂や脅迫や復讐心にいとも容易く変わりうるそれは、真の「愛」であろうか。自らの愛情に「盲目的に身を委ねる」こと、自らの愛情のために裏切りを重ねること、あるいは言葉巧みに第三者を「引きずり回す」こと、それらは、真の「愛」がなすべきことであろうか。雄弁な彼ら3人の「愛」、すなわち「情念」passionに対して、ラシーヌは、寡黙なアンドロマックの深癖な心情と決意を際立たせている。実際、「極限状態」においてさえ、亡き夫への忠実な思いを貫くため、息子の命のため、自己犠牲を選ぶアンドロマックだけが、唯一、真の「愛」を生きているのではなかろうか。

『アンドロマック』は、ラシーヌの初期の傑作の名にふさわしいものである。登場人物たちの巧みな配置は、観客や読者を常に緊張感を抱かせる。登場人物たちのさまざまな心情の推移やその複雑さを表わす、極めて精緻なフランス語の言葉の選択や文体的技法は、彼らの心理の微妙なあり方を巧みに知らしめるものである。それらの文学的表現技巧は、オレストの執拗な恋の幻想のゆくえを、ピリュスの裏切りの先鋭化を、エルミオーヌの研ぎ澄まされてゆく残酷性を、そしてアンドロマックの崇高さをこの上なく巧妙に表現している。さまざまな「極限状態」を表す文学的表現技巧に特徴づけられるラシーヌのこの作品は、その「極限状態」へと向かう人間

のさまざまなありようを示すゆえに、時代や国境を超え、普遍性を目指したフランス古典主義文学の秀逸した一例として、観客・読者に、共感、憐憫そして感動を与え続けるものであるといえるであろう。

注

- 1) “Voilà un peu de vers, tout le sujet de cette tragédie. Voilà le lieu de la Scène, l’Action qui s’y passe, les quatre principaux Acteurs, et même leurs Caractères (...)”
Jean RACINE, « *A Madame* », *Andromaque*, *Œuvres complètes*, *Théâtre et Poésie*,
Bibliothèque de la Pléiade, Gallimard, Paris, 1999, p. 197.

以下、この作品の引用は、すべてこの版による。また、引用文の訳はすべて筆者による。ただし、訳に際し、渡辺守章氏の翻訳（『フェードル アンδροマック』岩波書店、1993）を参考にさせていただいた。なお、強調はすべて筆者による。

- 2) Oui, puisque je retrouve un Ami si fidèle,
Ma Fortune va prendre une face nouvelle ;
Et déjà *son courroux* semble s’être adouci
Depuis qu’elle a pris soin de nous rejoindre ici.
Qui l’eût dit, qu’un *ravage à mes vœux si funeste*
Présenterait d’abord Pylade aux yeux d’Oreste ?
Qu’après plus de six mois que je t’avais perdu,
A la Cour de Pyrrhus tu me serais rendu ? (1 – 8 行)
- 3) Cf. Je craignais que le Ciel, par un cruel secours,
Ne vous offrit *la mort que vous cherchiez toujours*. (19–20行)
- 4) Cf. Tu vis mon désespoir ; et tu m’as vu depuis
Trainer de Mers en Mers ma chaîne et mes ennuis. (43–44行)
- 5) Hélas ! Qui peut savoir *le Destin qui m’amène*
L’Amour me fait ici chercher une Inhumaine.
Mais qui sait ce qu’il doit ordonner de *mon Sort*,
Et si je viens chercher ou la vie ou la mort ? (25–28行)
- 6) Car enfin n’attends pas que *mes feux redoublés*
Des périls les plus grands puissent être troublés,
Puisque après tant d’efforts ma résistance est vaine,
Je me livre en aveugle au destin qui m’entraîne. (95–98行)
- 7) Oreste

Ah ! Madame ? Est-il vrai qu’une fois

Oreste en vous cherchant obéisse à vos lois ?

(...)

Hermione

Je veux savoir, Seigneur, si vous m'aimez.

Oreste

Si je vous aime ? Ô Dieux! Mes serments, mes parjures,

Ma fuite, mon retour, mes respects, mes injures,

Mon désespoir, mes yeux de pleurs toujours noyés,

Quels témoins croirez-vous, si vous ne les croyez ?

Hermione

Vengez-moi, je crois tout. (...)

Courez au Temple. Il faut immoler ...

Oreste

Qui ?

Hermione

Pyrrhus. (1147-1176行)

8)

Oreste

Elle meurt ? Dieux ! Qu'entends-je ?

Pylade

Et quoi ? Vous l'ignoriez ?

(...)

Un poignard à la main sur Pyrrhus se courber,

Lever les yeux au Ciel, se frapper, et tomber.

Oreste

Grâce aux Dieux ! *Mon malheur passe mon espérance !*

Oui, je te loue, ô Ciel, de ta persévérance !

Appliqué sans relâche au soin de me punir,

Au comble des douleurs tu m'as fais parvenir.

Ta haine a pris plaisir à former ma misère ;

J'étais né pour servir d'exemple à ta colère,

Pour être *du Malheur un modèle accompli.*

(...)

Mais que vois-je ? A mes yeux Hermione l'(=Pyrrhus)embrasse ?

Elle vient l'arracher au coup qui le menace

Dieux ! Quels affreux regards elle jette sur moi !

Quels Démons, quels serpents traîne-t-elle après soi ? (1648-1680行)

9) Cf. Et qui ne se serait comme moi déclarée,

- Sur la foi d'une amour si *saintement* jurée ? (461-462行)
- 10) Hermione, Seigneur, *peut* m'être toujours chère,
Je *puis* l'aimer, sans être esclave de son Père ;
Et je saurais peut-être accorder en ce jour
Les soins de ma grandeur, et ceux de mon amour. (241-244行)
- 11) Ah ! Qu'ils s'aiment, Phoenix ! J'y consens. Qu'elle parte.
Que charmés l'un de l'autre ils retournent à Sparte !
Tous nos Ports sont ouverts et pour elle et pour lui.
Qu'elle m'épargnerait *de contrainte et d'ennui* ! (253-256行)
- 12) J'ai songé, comme vous, qu'à *la Grèce, à mon Père,*
A moi-même, en un mot, je devenais contraire (.) (609-610行)
- 13) Oreste
Et jusque dans l'Épire il (=le fils d'Hector) les (=les Grecs) peut attirer.
Prévenez-les.
- Pyrrhus
Non, non. J'y consens avec joie.
Qu'ils cherchent dans l'Épire *une seconde Troie.*
Qu'ils confondent leur haine, et ne distinguent plus
Le sang qui les fit vaincre et celui des Vaincus. (228-232行)
- 14) Je vous rends votre Fils, et je lui sers de Père ;
Je l'instruirai moi-même à venger les Troyens.
J'irai punir les Grecs de vos maux et des miens.
Animé d'un regard, je puis tout entreprendre.
Votre Illion encor peut sortir de sa cendre.
Je puis, en moins de temps que les Grecs ne l'ont pris,
Dans ses Murs relevés couronner votre Fils. (326-332行)
- 15) Cf. (...) Il (=Pyrrhus) est *au comble de ses vœux,*
Le plus fier des Mortels, et le plus amoureux. (1439-1440行)
- 16) Cf. *Autour du Fils d'Hector* il a rangé sa Garde,
Et croit que c'est *lui seul* que le péril regarde. (1461-1462行)
- 17) Je sais quel est Pyrrhus. Violent, mais sincère (.) (1089行)
- 18) cet aveu dépourvu d'artifice (1317行)
- 19) Hé quoi ? (...)
Quelle est cette rigueur tant de fois alléguée ?
J'ai passé dans l'Épire où j'étais reléguée.
Mon Père l'ordonnait ; mais qui sait si depuis
Je n'ai point en secret partagé vos ennuis ?

(...)

Enfin, *qui vous a dit* que malgré mon devoir,
Je n'ai pas quelquefois souhaité de vous voir ?

Oreste

Souhaité de me voir ! Ah divine Princesse ... (519-529行)

20) Mais, grâce, est-ce à moi que ce discours s'adresse ? (530行)

21) Il faut donc m'expliquer. Vous agirez ensuite.

Vous savez qu'en ces lieux mon devoir m'a conduite,
Mon devoir m'y retient ; et je n'en puis partir,
Que mon Père ou Pyrrhus ne m'en fasse sortir.
Au nom de Ménélas allez lui faire entendre
Que l'*Ennemi des Grecs* ne peut être son Gendre.
Du Troyen ou de moi faites-le décider :

(...)

Adieu. S'il (=Pyrrhus) y consent, je suis prête à vous suivre. (581-591行)

22) Cf. Je l'épouse. Il semblait qu'un spectacle si doux

N'attendît en ces lieux qu'un Témoin tel que vous (=Oreste). (619-620行)

23) Orestes

Et votre âme à ses vœux ne sera pas rebelle ?

Hermione

(...)

Mais que puis-je, Seigneur ? On a promis ma foi.
Lui ravirai-je un bien, qu'il ne tient pas de moi ?
L'Amour ne règle pas le sort d'une Princesse :
La gloire d'obéir est tout ce qu'on nous laisse.
Cependant *je partais*, et vous avez pu voir
Combien *je relâchais* pour vous de mon devoir. (813-826行)

24) (...) Ah ! C'en est trop, Seigneur.

Tant de raisonnements offensent ma colère.
J'ai voulu vous donner les moyens de me plaire,
Rendre Oreste content ; mais enfin je vois bien,
Qu'il veut toujours se plaindre, et ne mériter rien. (1236-1241行)

25) *Quel plaisir !* de venger moi-même mon injure,

De retirer mon bras teint du sang du Parjure,
Et pour rendre sa peine et *mes plaisirs plus grands*,
De cacher ma Rivale à ses regards mourants. (1269-1272行)

26) Ah ! *si du moins Oreste*, en punissant son crime,

Lui (=à Pyrrhus) laissait le regret de mourir ma Victime !

Va le trouver. Dis-lui qu'il apprenne à l'Ingrat

Qu'on l'immole à ma haine, et non pas à l'Etat.

Chère Cléone, cours. Ma vengeance est perdue

S'il ignore en mourant que c'est moi que le tue. (1273-1278行)

- 27) Allons : C'est à moi seule, à me rendre justice.

Que de cris de douleur le Temple retentisse.

(...)

Je ne choisirai point dans ce désordre extrême.

Tout me sera Pyrrhus, fût-ce Oreste lui-même. (1493-1498行)

- 28) Où suis-je ? Qu'ai-je fait ? Que dois-je faire encore ?

Quel transport me saisit ? Quel chagrin me dévore ?

Errante, et sans dessein, je cours dans ce Palais.

Ah ! Ne puis-je savoir si j'aime ou si je hais ?

Le Cruel ! de quel œil il m'a congédiée ?

Sans pitié, sans douleur au moins étudiée ?

(...)

Et je le plains encore ? Et pour comble d'ennui,

Mon cœur, mon lâche cœur s'inéresse pour lui ?

Je tremble au seul penser du coup qui le menace ?

Et prête à me venger je lui fais déjà grâce ?

(...)

Non, non encore un coup, laissons agir Oreste.

Qu'il meure, puisqu'enfin il a dû le pévoir,

Et puisqu'il m'a forcé enfin à le vouloir.

A le vouloir ? Hé quoi ? C'est donc moi qui l'ordonne ?

Sa mort sera l'effet de l'amour d'Hermione ?

Ce Prince, dont mon cœur se faisait autrefois,

Avec tant de plaisirs redire les Exploits,

A qui même en secret je m'étais destinée,

Avant qu'on eût conclu ce fatal hyménée,

Je n'ai donc traversé tant de mers, tant d'Etats,

Que pour venir si loin préparer son trépas,

L'assasiner, le perdre ? Ah devant qu'il expire ... (1401-1437行)

- 29) Hermione

Mais parle. De son sort qui t'a rendu l'arbitre ?

Pourquoi l'assasiner ? Qu'a-t-il fait ? A quel titre ?

Qui te l'a dit ?

Orestes

O dieux ! Quoi ne m'avez-vous pas

Vous-même, ici, tantôt, ordonné son trépas ?

Hermione

Ah ! Fallait-il en croire *une Amante insensée* ?

Ne devais-tu pas lire au fond de ma pensée ?

Et ne voyais-tu pas, dans mes emportements,

Que mon cœur démentait ma bouche à tous moments ? (1581-1599行)

- 30) Cf. Je renonce à *la Grèce, à Sparte, à son Empire,*
A toute ma Famille ; et c'est assez pour moi. (1601-1602行)
- 31) *C'est Hector, disait-elle, en l'embrassant toujours ;*
Voilà ses yeux, sa bouche, et déjà son audace,
C'est lui-même ; c'est toi, cher Epoux, que j'embrasse. (656-658行)
- 32) Cf. *Sans Parents, sans Amis, sans espoir que sur moi (=Pyrrhus).*
Je puis perdre son Fils, peut-être je le doi ;
Etrangère ... Que dis-je ? Esclave dans l'Epire (.) (691-693行)
- 33) Je vous le dis, il faut ou périr ou régner.
Mon cœur, désespéré d'un an d'ingratitude,
Ne peut plus de son sort souffrir l'incertitude.
C'est craindre, menacer et gémir trop longtemps.
Je meurs si je vous perds, mais je meurs si j'attends. (972-976行)
- 34) Ce Fils, que de sa flamme il me laissa pour gage ? (1021行)
- 35) Et je laisse avec lui périr tous ses aïeux ? (1028行)
- 36) Mais j'ai cru qu'à mon tour tu me connaissais mieux.
Quoi donc as-tu pensé qu'Andromaque infidèle,
Pût trahir un Epoux qui croit revivre en elle,
Et que de tant de Morts réveillant la douleur,
Le soin de mon repos me fit troubler le leur ?
Est-ce là cette ardeur tant promise à sa cendre ?
Mais son Fils périssait, il l'a fallu défendre.
Pyrrhus en m'épousant s'en déclare l'appui.
Il suffit. Je veux bien m'en reposer sur lui,
(...)
Je vais donc, puisqu'il faut que je me sacrifie,
Assurer à Pyrrhus le reste de ma vie ;
Je vais *en recevant sa foi sur les Autels,*

L'engager à mon fils par des navuds immortels.

Mais aussitôt ma main, à moi seule funeste,

D'une infidèle vie abrègera le reste,

Et sauvant ma vertu, rendra ce je dois,

A Pyrrhus, à mon Fils, à mon Epoux, à moi. (1080-1100行)

37) Cf. *Voilà de mon amour l'innocent stratagème* (.) (1101行)